



和's YAMATO (わすやまと)

2026
秋号

- 写真で楽しむ美しい自然「彼岸花 前橋市西大室町」
- 大学でヤマトの特色、建設工業化を紹介
- 大学と企業を繋ぐ新施設を見学
- 葉山町役場庁舎 空調設備等改修工事が完了
- 神奈川県葉山町 レスポンスブルツウリズムの取り組み
- 群馬の芸術家 豊野芳子
- 郷土史跡めぐり 日高遺跡(群馬県高崎市)
- 秀長亡き後の豊臣政権
- 北条氏征伐で天下統一が完了
- 秀長最後の出陣となった九州攻め
- 軍事・政治手腕で豊臣政権を支える
- 豊臣政権の外交・調整役として活躍
- 四国攻めの総大将となった秀長
- 紀州を平定する秀長
- 小牧・長久手の戦い
織田信雄との関係悪化で家康と対峙
- 本能寺の変、清須会議から賤ヶ岳の戦いへ
- 豊臣秀長 秀吉の活躍を影で支えた知将

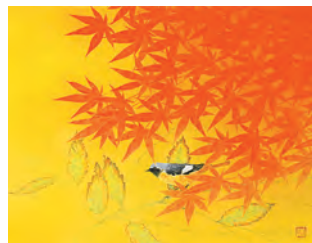


写真で楽しむ 美しい自然

『彼岸花』前橋市西大室町

《撮影》藤重朋紀氏 プロフィール

1952年 群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971年 群馬県渋川高等学校卒業
1973年 東京写真専門学校中退
1979年 コマーシャルフォトスタジオ創美社入社
1980年 会社の休日を利用してながら県内の「風景」や「民俗芸能」「画家とアトリエ」など撮り始める。
2001年 フリー
2010年 写真集「上州路一本桜」
2011年 写真集「上州路」
2014年 上州(群馬県)から見える「富士山」をテーマに写真撮影を始める。
2026年 今まで撮影してきた写真を各テーマごとにまとめて写真展として発表する予定。



表紙の絵
「森のいわう」
イロハモミジとジョウビタキ(オス)
《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠樹)(同2011~25) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~25) 2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作 2014年 個展(日本橋三越本店)(同2017,20,23) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト)
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーⅢ出品 2020年 上毛芸術文化賞受賞 2022年 個展(株式会社ヤマト)
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作 現在 日本美術院院友 群馬県美術会理事 慶應義塾大学非常勤講師(2013~26)
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL <http://sutooo.net/>



和's YAMATO わすやまと

2026年秋号(第70号)

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO秋号 2026年(令和8年)9月発行

発行:株式会社ヤマト広報室 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト

【発行】株式会社ヤマト 〒371-0844 群馬県前橋市古市町118 TEL:027-290-1800(代) FAX:027-290-1896
支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、波川、川口、多摩、横須賀、青森
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ <https://www.yamato-se.co.jp/>



「森のいわう」イロハモミジとジョウビタキ(オス) 須藤和之 画

豊臣秀長



秀吉の活躍を影で支えた知将

豊臣秀吉は織田信長に仕え、信長の後継者として天下統一を果たすが、秀吉を支える大きな存在として、弟の秀長の存在があり、軍事と政務の両面から兄の秀吉を支えた。合戦の際、秀長は副将格として軍列に加わり、戦後処理にあたっては、秀吉の補佐役としての能力を存分に発揮した。豊臣兄弟の力の結束が、天下統一という大事業を成しえたといえるだろう。

本能寺の変、清須会議から賤ヶ岳の戦いへ

天正10年（1582）6月2日、本能寺の変で織田信長が自害し、同年6月13日の山崎の戦いで明智光秀が秀吉に敗れ、それから2週間後の6月27日、織田家の重臣たちは尾張の清須城に集まり、信長死後の体制について協議した（清須会議）。本能寺の変では信長だけでなく、家督を継いでいた

長男信忠も自害したため、織田家の当主を早急に決める必要があった。

協議の結果、信忠嫡男の三法師（後の秀信）が家督を継承することが決まる。三法師はわずか3歳であったため、成人するまでは家督を代行する名代を置くことも決まった。しかし、名代の座をめぐり、信長の次男信雄と三男信孝が名乗りを上げて双方譲らなかつたため、名代は空席となり、政権運営は、羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、

池田恒興の四重臣による集団指導体制が取られることになった。

信長・信忠の遺領や光秀の所領は信雄と信孝、秀吉たち重臣に配分された。秀吉は光秀を討った功績が評価されて山城、丹波、東河内を得たため、織田家中で最大勢力となった。秀長の所領も加増され、但馬に加えて隣国丹波の一部にも及んだ。清須会議によって、名代になれなかつた信孝と、秀吉の台頭を快く思わない勝家は信孝と結託し、織田家中は秀吉・信雄派と勝家信孝派の二つに分裂していく。

天正11年（1583）、反目していた秀吉と勝家は武力衝突し、秀長は北陸から近江に進出した勝家軍と対峙する。秀長は防衛に徹していたが、勝家の甥・佐久間盛政の猛攻を受けた後、秀吉軍は逆襲に転じた。激しい山岳戦の末、秀吉軍が優勢となり、勝家は敗走する。秀吉は勝家を追撃し、勝家の居城である北之庄城を包囲し、勝家は自害する（賤ヶ岳の戦い）。

秀吉は勝家と信孝を滅ぼしたことで、信長の後継者に最も近い存在となり、新たな居城として大坂城の築城も開始した。信長の遺志を継ぎ、天下統一の事業に着手した秀吉を支える秀長の役割は、ますます大

きくなる。

小牧・長久手の戦い 織田信雄との関係悪化で家康と対峙

天正11年（1583）、秀吉は賤ヶ岳の戦いでの勝利を経て、家中筆頭の重臣となった。信雄は秀吉たちの推薦で織田家の家督を継ぎ当主となり、秀吉は信雄を補佐する立場に就いた。だが、秀吉は家臣としての立場を越え、同僚だった丹羽長秀たち重臣を服属させて、織田家に代わり天下人を目指す。当然ながら信雄は秀吉に不満を持つが、その領国は尾張・伊勢・伊賀の三カ国に過ぎず、単独では対抗できなかった。そこで、徳川家康との連合を模索する。

家康は信長に事実上従属することで三河・遠江・駿河の三カ国を手に入れたが、当時は本能寺の変に伴う混乱に乗じ、甲斐・国と信濃の過半も支配下に収めていた。信雄からの申し入れを受けた家康は秀吉との戦いを決意する。

翌12年（1584）3月、信雄は秀吉に誼（よしみ）を通じていた重臣3名を殺害し、秀吉への敵意を鮮明にし、家康も出陣して信雄と尾張の清須城で合流する。対す

る秀吉も大坂を出陣し、尾張に向かった。

尾張の各所で両軍は激突したが、同じく信雄の領国伊勢も戦場となっていた。10月下旬、信雄と家康の分断を目論む秀吉は南伊勢を制圧した。11月に入ると、北伊勢に攻め込み、領国の半分近くを占領された信雄は窮地に陥り、抗戦を断念する。信雄は秀吉の狙い通り、和睦に応じた。和睦の条件が南伊勢・伊賀の割譲と人質の提出であった以上、事実上の降伏であり、服属だった。

連合していた信雄が秀吉と和睦したことで家康も和睦せざるを得なくなる。小牧・長久手の戦いは自然消滅する形で終わった。だが、家康は信雄のように秀吉に服属するつもりはなかつた。秀吉と家康との戦いは休戦状態に入ったに過ぎず、長期化していく。この戦いで、秀吉は伊勢松ヶ島城を陥落させるなどの軍功を挙げる一方、信雄との交渉にあたっていた。

紀州を平定する秀長

天正13年（1585）3月、秀吉は強力な自治武装勢力（根来衆・ねごろしゅう）・雑賀衆（さいかしゅう）などが割拠していた紀伊国の平定に着手する。紀州では寺院や地侍が連合した「紀州惣国一揆」が自治

をなし、大名の支配を強く拒絶していた。

その中核である根来衆や雑賀衆に対しては、信長も平定を果たせなかつた。紀伊平定を目指す秀吉も、和泉岸和田城に家臣を置き抑えとしていたが、天正12年の小牧・長久手の戦いの折、留守を突かれて大坂近くまで攻め込まれる事態に直面した。

この脅威を痛感した秀吉は、天正13年3月、毛利水軍を加えた総勢数万の大軍で紀州攻めを開始した。和泉の千石堀城などを瞬く間に攻略して和泉を平定すると、紀州へ侵攻して根来寺を屈伏させ、紀州太田城に籠る雑賀一揆も開城に追い込んだ。さらに高野山など服従していなかつた寺院勢力も軒並み屈伏させ、秀長らの活躍もあり、紀州惣国一揆は完全に平定された。

秀吉は秀長に紀州攻めの軍功を認め、和泉の一部と紀州二カ国を与えた。平定したばかりの紀州や和泉では秀吉への反発が強く、その敵意が反乱に転じる可能性も高かつた。秀吉からすれば、不穏な状況にある大坂に近い国には、信頼できる者を置いておきたい。両国の統治を任せられるのは秀長しかいなかったと考えられる。



和歌山城 所在地：和歌山市一番丁
天正13年、秀長は紀州支配の拠点として和歌山城を築城し、藤堂高虎らが普請を担った。江戸時代には紀州徳川家が居城として使用した。

四国攻めの総大将となった秀長

紀州および和泉南部を抑えた秀吉は、間を置くことなく四国遠征に着手した。四国の大部分を支配する長宗我部元親が、織田信雄や徳川家康と同盟を結んで秀吉への抵抗を続けていたためである。当初の構想において秀吉は、元親から阿波と讃岐を没収する一方、土佐・伊予の保持を認めることで降伏させようと考えていた。しかし、伊予の獲得を求める毛利氏の意向に配慮した結果、元親との交渉は決裂し、遠征軍の派遣

となる。

秀吉は自らの代理として弟の秀長を四国攻めの総指揮官に抜擢した。自らは海を渡らず、岸和田城にとどまって全軍の采配を振るう。紀州の平定からわずか2ヶ月後の天正13年（1585）6月、秀長は甥の秀次とともに、それぞれ和泉の堺と摂津の明石から海路で淡路島へ渡った。淡路にて両軍が合流した後、再び船を進めて阿波の土佐泊へと渡り、約6万の将兵を率いて上陸を果たした。

四国へと進軍したのは、阿波へと攻め入っ



瓢軍談五十四場 四十九 久長久次和氣の城を責る
四国攻めを題材にした浮世絵。歌川芳艶 筆【国立国会図書館蔵】

た秀長・秀次率いる秀吉軍の本隊だけではない。秀吉家臣の蜂須賀正勝や黒田孝高、宇喜多秀家らの率いる2万3千人の兵が讃岐の屋島へ上陸した。さらに秀吉の命を受けた毛利氏も、小早川隆景と吉川元長に率いられた3万人以上の大軍を伊予へ上陸させた。三方面から攻め込んだ秀吉軍は総勢10万人を超えており、迎える長宗我部軍はその半数にも届かない規模であった。

対しては、四国攻めを通じて関係を深め、小早川隆景への恩賞（伊予拝領）を秀吉との間で調整した。さらに隆景・吉川元春や当主の毛利輝元が来坂・上洛した際には秀吉の意を受けて手厚く歓待した。九州攻めでは毛利勢を自身の指揮下に収めるなど、強固な信頼関係を築いた。また、長宗我部元親が秀吉に謁見する際にも仲介の労をとっている。

秀吉の最も信頼する肉親である秀長が間に立つ効果は絶大であり、自家の安泰を願う諸大名からも大いに頼りにされた。秀長が秀吉と服属大名を強力につなぎ留めたからこそ、政権の安定と天下統一が実現したといえる。

軍事・政治手腕で豊臣政権を支える

秀長は軍事面のみならず政治面においても、天下統一の実現に大きく寄与した。その威厳を裏付けたのは、百万石に達する所領と高い官位であった。

天正13年の紀州攻めの功績で紀州や和泉の一部を、四国攻めの功績で大和や伊賀の一部を与えられ、百万石の大名となった。これは秀吉の家臣団の中で最大であり、この石高を超えたのは毛利氏と家康のみである。

豊臣政権の外交・調整役として活躍

秀長の天下統一における大きな貢献は、合戦や戦後処理にとどまらず、服属した諸大名の接待役や秀吉との調整役を務め、豊臣政権を安定させたことにある。

弟という絶妙な立場を活かした秀長は、諸大名が反旗を翻さないよう良好な関係の構築に努めた。特に重要だった毛利氏に勢力を拡大させていた。かつては島津氏、豊後を本拠とする大友宗麟、肥前を本拠とする龍造寺隆信が三つ巴の戦いを展開していたが、天正12年には島津一強の状況となった。翌13年10月2日、島津の過度な侵攻を抑制したい秀吉は、争っている島津・大友の両家へ停戦命令を発した。関白である自身は日本全土を治める天皇より領地裁定の権限を委ねられているとし、天皇の権威を背景に戦闘の中止を命じる。併せて、領土問題の解決を自身へ一任するよう求めた（惣無事令）。秀吉は惣無事令を活用して天下統一を進め、その裁定に従わない大名には征伐が待っていたのである。

天正14年4月、秀吉は両氏へ領地裁定を通告したが、大友側に有利な一方、島津氏側には極めて不利な内容であった。自力で獲得した土地の大半を大友氏へ返還せよという命令であり、島津氏には到底容認できなかつた。島津は秀吉に背き、大友との戦いを再開する。そのため同年7月、秀吉は島津征伐を決定し、長宗我部ら四国勢や毛利勢を九州へ向かわせた。翌15年2月10日に秀長が九州へ出陣し、3月1日には秀吉自身も京を出た。九州へ赴いた豊臣軍の総勢は20万人を超えていた。

秀長の領地は大坂や京都の近郊に位置し、秀吉の本拠を固める役割を果たした。大坂には秀吉の居城があり、京都には秀吉が関白を務める朝廷が存在したためである。

秀長の官位は、天正13年7月に秀吉が関白として朝廷の頂点に立つと急上昇する。同年10月に従三位参議兼近衛中将、翌14年11月に正三位権中納言、15年8月には従二位権大納言へ昇進した。官位の序列で言えば、従一位の関白太政大臣である秀吉、正二位内大臣の織田信雄に次ぐ第三位であり、従二位権大納言の家康と同格であった。信雄が秀吉により改易された後は、官位の上で家康と並ぶナンバー2の存在となる。自身に次ぐ高位を与えることで、補佐役として政治的手腕を存分に発揮させたという狙いがあった。

大和の興福寺多聞院院主の日記『多聞院日記』に、秀吉が新王となり、秀長が関白に就くのではないかと噂がある、とする記述がある（天正14年10月8日）。秀長が秀吉に代わって関白に就任すると噂されるほど、秀長は豊臣政権のナンバー2として認知されていたことが伺われる。

天正17年5月に鶴松が生まれるまで、秀吉には長らく跡継ぎがいなかった。甥の秀

次らはいたものの、秀長もまた有力な後継者候補であったと考えられる。豊臣家の中で百万石という最大の石高を持ち、官位でも秀吉の直下に位置するなど、後継者にもさわしい地位が与えられていた。鶴松誕生後は、後見役として期待されていたはずである。

その後、2年と経たないうちに秀長が死去したため秀吉の期待は潰えるが、『多聞院日記』に記された世評は、秀吉が秀長を引き上げた結果であった。秀長もその期待に応えて軍事面や政治面で秀吉を支え、天下統一に貢献する。兄弟の絆が理想的に働き、豊臣政権は運営されたのであった。

秀長最後の出陣となった九州攻め

天正13年（1585）7月、秀吉は朝廷から国政を代行する関白に任命され、天下人にふさわしい権威を獲得する。翌14年に家康は秀吉に服属し、天下統一のため奔走することになった。秀吉の支配が及ばない地域は九州および関東・東北のみとなり、関東の北条氏政や東北の伊達政宗を服属させる任務は家康が担い、秀吉・秀長は九州平定に専念する体制が整った。

九州では薩摩を本拠とする島津義久が



豊臣秀吉・島津義久の和睦の像【泰平寺公園】
島津義久が剃髪して泰平寺で秀吉に謁見する姿を描いている。所在地：鹿児島県薩摩川内市

豊臣秀吉・秀長 関係年表

天正15年(1587)	5月	秀吉・秀長、九州へ出陣し、島津氏を降伏させる
	8月	秀長、従二位・権大納言となる
	9月	秀吉の政庁兼邸宅の聚楽第が完成
天正16年(1588)	1月	秀長、羽柴鍋丸(秀保)を養嗣子に迎え、養子・千丸と離縁
	4月	後陽成天皇が聚楽第に行幸
	7〜9月	毛利輝元、小早川隆景、吉川広家が上洛して秀吉に出仕、秀長が接待
天正17年(1589)	12月	秀長家臣の吉川平助が秀吉により処刑される
	5月	淀城にて秀吉の若公・棄(鶴松)が誕生
	11月〜12月	秀長、摂津有馬湯に約1ヶ月滞在
天正18年(1590)	3〜8月	秀吉、北条氏征伐に出陣し、奥羽・関東仕置を経て天下統一を達成
天正19年(1591)	1月	秀長、長女と養嗣子・秀保の婚儀を行う
		秀長が大和郡山城にて死去
	2月	千利休が秀吉の怒りを買ひ自刃
	8月	秀吉の嫡男・鶴松が死去
	12月	秀吉、甥の秀次に家督と関白職を譲り、以後「太閤」を称する
	4月	文禄の役(第一次朝鮮出兵)が始まる
天正20年/文禄元年(1592)	7月	大政所が聚楽第にて死去
	9月	豊臣(小吉)秀勝が朝鮮出兵の陣中で病死
文禄2年(1593)	8月	大坂城にて秀吉の若公・拾(秀頼)が誕生
文禄3年(1594)	1月	秀吉、伏見城を築城し移住
文禄4年(1595)	4月	豊臣秀保が病死
	7月	豊臣秀次が高野山へ出奔し、自害
	閏7月	慶長伏見地震で伏見城が倒壊し、移転
	12月	秀吉、フランシスコ会修道士ら2人を処刑
	1月	慶長の役(第二次朝鮮出兵)が始まる
	9月	秀頼、従四位下・左近衛権中將となる
慶長2年(1597)	3月	秀吉、山城醍醐寺で盛大な花見を催す
	4月	秀頼、従二位・権中納言となる
	8月	秀吉が京都伏見城にて死去
慶長3年(1598)	4月	後陽成天皇より秀吉に「豊国大明神」の神号が与えられ、神位正一位が授けられる
慶長4年(1599)	9月	関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利
慶長5年(1600)	2月	徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開く
慶長8年(1603)	7月	家康が孫娘・千姫を秀頼に嫁がせる
慶長10年(1605)	4月	秀頼が右大臣に昇進
慶長19年(1614)	7月	方広寺の鐘銘事件が起こる
	11月〜12月	大坂冬の陣
	5月	大坂夏の陣
慶長20年(1615)		秀頼が自刃し、豊臣家が滅亡する



小田原城
所在地：神奈川県小田原市

北条氏征伐で天下統一が完了

島津氏を従え九州を平定したことで、関東と東北を抑えれば天下統一は完了する状態となった。家康は盟友の北条氏に対し、秀吉への服属を強く促す。北条氏はやむなく応じたが、天正17年(1589)11月3日、真田昌幸の持ち城の一つ上野国の名胡桃城を攻め落としてしまう。この武力行使は、

秀吉が北条と真田の係争地に関して下した領地裁定に異を唱えるものに他ならなかった。秀吉は惣無事令への違反とみなし、北条氏の征伐に踏み切る。

翌18年3月1日、秀吉は京を出陣し小田原へと進んだ。関東に向かった豊臣勢は、九州遠征の際と同じく総勢二十万人を超えていた。大軍を前に居城の小田原城へ籠城した北条氏は戦意を失う。七月五日に降伏して関東は平定され、続いて東北も治まり、その年のうちに天下統一が完了した。

しかし、秀長は小田原攻めに従軍できなかった。秀吉が北条討伐を決意した当時、病の苦しみにあつたからである。領国の大和では病氣平癒の祈禱が春日大社や興福寺で繰り返されたものの、病状が好転するとはなかった。天下統一を見届けることはできたものの、その総仕上げである小田原攻めで秀吉を補佐することは叶わなかった。天正19年正月22日、秀長は郡山城において52歳の生涯を閉じる。

秀長亡き後の豊臣政権

秀長が亡くなつてからの豊臣政権は、政権の「最大の支柱」であり「ブレーキ役」を失つたことで、それまでの安定から徐々に歪みが生じることになった。生前の秀長は、気性の激しい兄・秀吉の独断的な政策や感情的な処置を穏便に諫める、政権内唯一無二の調整役だった。温厚で人望が厚く、諸大名からの信頼も厚かつた秀長がいたからこそ、豊臣政権の強大な権力は絶妙なバランスで保たれていた。秀長が消えたことで、政権内部の不満や派閥対立を和らげるクッションが失われた。

諫める存在を失つた秀吉は、次第に周囲の意見を聞き入れなくなり、天正20年(1592)、突如として明(中国)の征服を目指す朝鮮出兵を開始する。もし生前の秀長であれば、国内の基盤を固めたばかりの時期に大軍を海外へ送るというこの巨大な計画に対して、財政面や外交面の現実的なリスクを挙げて猛反対、あるいは計画の規模を縮小させていたといわれている。この無理な外征は多大な人的・経済的損失を生み、国内の大名たちの負担を激増させ、豊臣政権の足元を大きく揺るがす最大の失

策となった。

秀長の死後、豊臣政権の実務は石田三成らの「文治派(官僚派)」が担うようになるが、朝鮮出兵での軍功や処遇を巡って、福島正則や加藤清正らの「武断派(武闘派)」との対立が先鋭化した。秀長という「諸大名をまとめ上げる重鎮」がいれば、こうした内部亀裂が致命的な派閥抗争に発展するのを防ぐことができたと考えられるが、誰も彼らを仲裁することができなかった。結果として、秀吉の死後、この対立は徳川家康の台頭を許すことになり、関ヶ原の戦い(慶長5年・1600年)に結びついていくことになる。

秀長の死は、豊臣政権の安定を維持する基盤が失われことを意味した。彼の死からわずか10年足らずで、政権崩壊へとつながる大動乱が次々と引き起こされることになったのである。

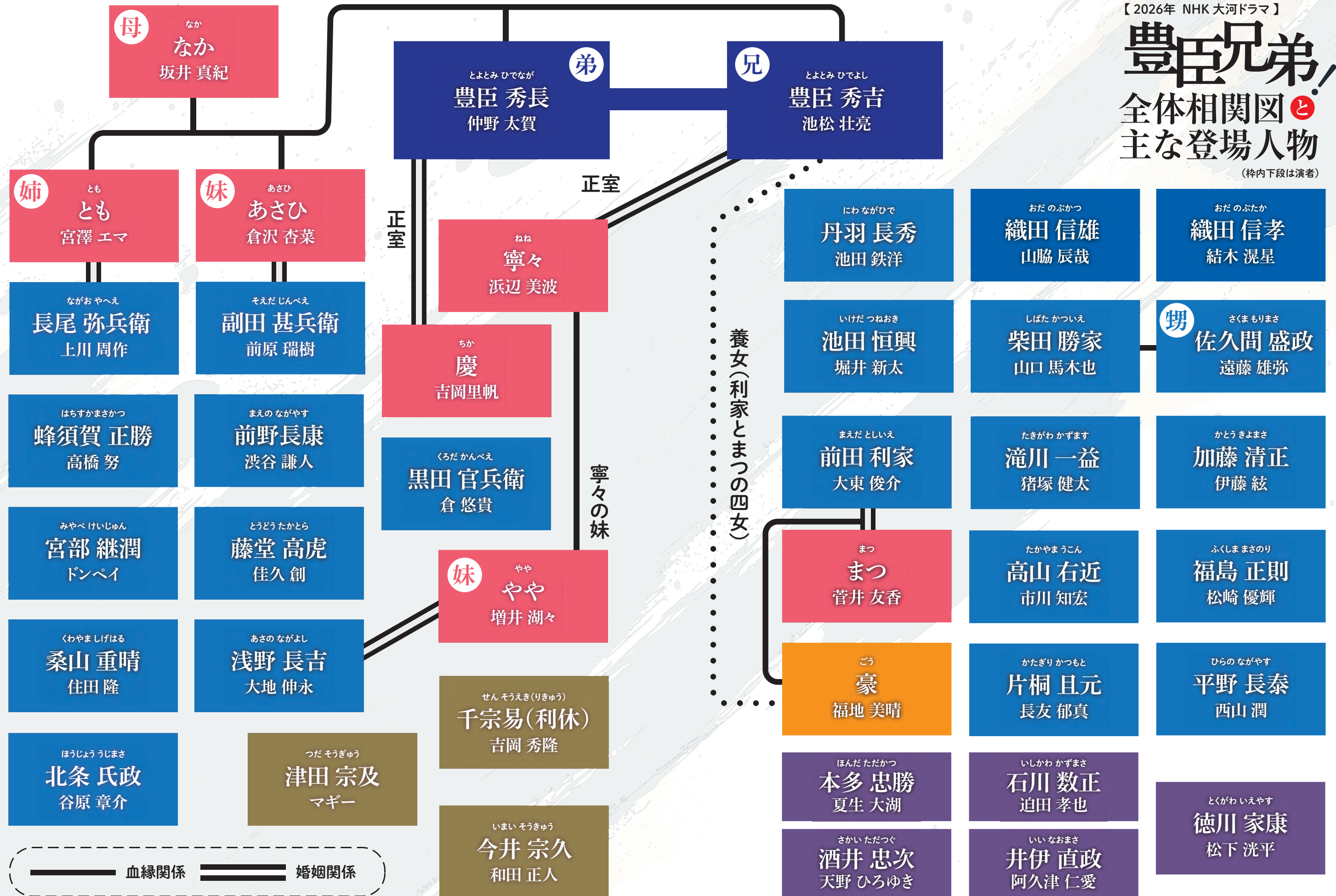
秀長の幼名は小竹。通称は小一郎。おもな官位は権大納言・美濃守。大和・大納言とも呼ばれた。秀長は天正12年に「秀長」に改名し、それ以前は「長秀」と名乗っていた。混乱を避けるため、本稿では秀長に統一して表記した。

主要参考文献：『日本史の中の兄弟たち』安藤優一郎著
文：木下直也

豊臣兄弟！

全体相関図と 主な登場人物

(枠内下段は演者)



日高遺跡



公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 主任調査研究員 野口 智子

はじめに

日本の人々が米と深い絆を結ぶようになってからは、いつからなのでしょう。縄文時代の暮らしは狩りや採集が中心で、水田での稲作が広まるのは、教科書でもおなじみの弥生時代になってからです。水田が導入されると、人々の生活は大きく変わり、社会の仕組みも発展していきました。広い水田を管理するために協力して作業することが増え、人々が次第に集まり、集落は大きくなっていきます。収穫した米を貯えたり分けたりする中で、やがて人々をまとめる役割を持つ人物も生まれました。そんな弥生時代の暮らしを今に伝えてくれる遺跡が、高崎市日高遺跡です。

日高遺跡の概要

日高遺跡は、前橋インターチェンジの南約800m、高崎市日高町中尾町に位置し、榛名山南麓の平坦な前橋・高崎台地の一角に立地しています。JR上越線が遺跡を横断し、車窓から史跡公園を眺めることができます。1977年(昭和52年)、関越自動車道の建設に伴い発掘調査され、翌1978年(昭和53年)に二回目の調査が行われました。その後、1989年(平成元年)に国の史跡に指定され、2014年(平成26年)に史跡公園として整備されました。

1 日高遺跡から出土した弥生時代の土器



日高遺跡の特徴

日高遺跡では、弥生時代に人々が住み始

めて以来、現代に至るまで様々な時代の暮らしが営まれてきました。なかでも弥生時代後期の水田、集落、墓域が一体となつて残る大変貴重な遺跡です。

また、大型の壺や甕、高杯などの土器や木製の道具など、当時の人々の暮らしを物語る貴重な遺物も多数出土しました。

1 水田

古墳時代初め頃、浅間山が噴火し日高遺跡を含む県内の広範囲が火山灰で被災しました。当時の人々には未曾有の大災害でしたが、皮肉なことにこの火山灰が遺跡保存には幸いし、当時の生活痕跡が良好な状態で保存され発掘につながったのです。

日高遺跡の水田は、集落の西側の谷地に自然地形を活かしてつくられていました。谷地の上流側に湧水があり、湧水を水田に引き入れるための水路が整備されていました。また、水田のほか水路、畦、畦を支えるための木組みの遺構、水温を管理して水田に流すための「ぬるめ」と呼ばれる溜池状遺構も確認されました。さらに農民たちの足跡までもが水田の畦にはっきりと残り、当時の稲作の様子が生き生きと伝わってきます。

日高遺跡で見つかったこれらの遺構は、弥生時代終わり頃の稲作の様子を具体的に伝えてくれる貴重な発見といえます。現在、発見された水田は復元整備され、史跡活用事業の一環として、初夏には田植え、秋には稲刈りが行われています。

2 集落

日高遺跡の南側には環濠集落が広がっています。環濠とは円形にめぐらせた堀のことで、環濠集落とは集落のまわり全体を円形の大きな堀で取り囲んだ集落のことをいいます。人々は環濠の内側に堅穴建物をつくり暮らしていました。

環濠の堀は断面がV字形で、深さは約1.2m、幅は約2〜2.5mほどあります。水をたたえない空堀で、堀のすぐ内側には土塁と呼ばれる小高い土の壁が築かれていました。堀の底から土塁の上までの高さは約3mにもなります。

では、環濠の大きな堀は何のために築かれたのでしょうか。一般的に環濠は集落を防御するための施設と考えられています。稲作が定着しはじめる弥生時代中期以降になると、環濠で集落を守る必要性が生じたと考えられます。

おわりに

日高遺跡は市民の憩いの場だけでなく、歩きながら歴史を学べる身近なスポットになっています。

現在、遺跡全体の北半分は公開されています。南側の区域は整備が進められている段階で、将来的には全体が復元整備される予定です。そうすると環濠集落の中を電車が横断して走るようになります。車窓から日高遺跡はどのように見えるでしょう。大きな円形の環濠と堅穴建物が広がる弥生時代の景観は、過去と現在の歴史が交差する独特の風景として映ることでしょう。



2 南上空から見た日高遺跡

8 円形周溝墓

7 上越線

6 環濠集落

環濠集落(未整備エリア)

5 水田



3 発見された水田



4 水田の畦で見つかった足跡



5 復元整備された水田



6 復元整備された竪穴建物



7 復元整備された環濠

土塁
堀



8 復元整備された円形周溝墓



9 円形周溝墓の周溝から出土した土器棺

所在地：高崎市日高町31番地2ほか
井野駅より徒歩30分
専用駐車場：43台(無料) 見学料：無料

引用文献
群馬県教育委員会1982
「日高遺跡」
高崎市教育委員会1979
「日高遺跡」(一)
高崎市教育委員会2005
「史跡日高遺跡」
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編
1999「群馬県遺跡大事典」上毛新聞社
写真提供
134 群馬県
29 高崎市教育委員会(2は部改委)
5678 筆者撮影
図(細線) 筆者作成

豊野芳子

ブナ林に塗り込めた人生

ブナ林を描く

日本画家・豊野芳子の絵のモチーフはブナの樹だ。ブナには「櫛」という漢字が当てられている。腐りやすく材木としては「分が無い」からだという。随分とブナには失礼な話だ。ブナは日本の温帯林を代表する落葉広葉樹で、北海道から鹿児島まで日本全国で見られ、「森の女王」と呼ばれるほどに愛されている。ある程度の標高が必要で、高原地帯では必ず出会う樹といえるだろう。

豊野が描くブナは季節も形も様々で、数え切れないほどのブナ林を描くこともあれば、数本の樹に絞って描くこともある。どれも魅力的だが、中でも一本の樹を対象に、ブナに特徴的な斑模様複雑な木肌に正面から取り組んだ作品が素晴らしい。樹の生命力までもが伝わってくるようで見飽きない美しさにあふれている。

遅いスタート

豊野芳子は一九六二(昭和三七)年に、森林文化都市を宣言する沼田市で、材木商を営む家の次女に生まれた。幼いときから木と樹に囲まれた生活が、将

来の豊野を運命付けていたかのように思えるが、豊野が絵描きとして身を立てるのはずっと後になってからの話だ。

中学生の時、姉に連れられて上野の国立西洋美術館で見た西洋絵画に惹かれて絵が好きになったが、高卒で地元の金融機関に就職した後、絵の道があきらめられず美術大学への受験を目指すも、父親の強い反対で断念した。

それでも一度、前橋のNHK文化センターで島崎庸夫が教える油絵教室に通ったことがあったようだが、自宅のアトリエに誘われながらも、道に迷ってあきらめたというエピソードがある。

豊野芳子の人生を語る際に避けて通れないのが、その身に降りかかった数々の試練だ。二十三歳で癌が発症し、その後も何度か豊野を襲った。悩んだ末の結婚、出産。しかし生まれてきた男の子とは一歳八カ月で死別。

その悲しみと喪失感からすがりついたのが日本画だった。このとき五十歳。比較的手近な油絵に比べて、素人には扱いにくいとされる日本画を始めるには、随分と遅いスタートだった。

は、最高賞である山崎種二記念特別賞まで射止めた。名門日本美術院の展覧会へは二〇二〇年に春の院展初入選。翌年には秋の本展にも入選し、度重なる入選の結果、二〇二三年には院友へと推挙された。

五十歳から日本画を始めて、十年余りで日本美術院の院友へ駆け上るなど、だれが想像しただろう。

ヤマトでの個展に向けて

今年二月、豊野芳子は企業メセナ群馬芸術文化奨励賞を受賞した。それを記念する大規模な個展が十月からヤマトで開催される。みなかみの民宿を会場とした二日間だけの個展を開いたことはあるが、今回が初個展と呼んで良いだろう。

沼田市内のアトリエを訪ねた。広い会場を埋めるだけの作品数がないので、これまでに描いた作品ほとんどを見せる予定だそう。ブナを描いた作品しか知らなかった私は、風景や草花などの多彩な作品群に少し面食らったが、冷静に見ていると、やはりブナの作品が秀逸だ。ブナに寄せる作者の心持ちが強いからだろう。

黄朽葉の風 / Wind of yellow leaves 2022

昨年故人となった恩師・角田信四郎は、豊野の作品を「五感を使って描いている」と評したそう。展示会場がブナ林のように感じられ、森に注ぐ光や、吹き抜ける風、その匂いまでもが感じられることを願っている。

美術研究家 染谷 滋

利根沼田文化を背景に

利根沼田地域は、芸術文化に優れた人物を多く輩出したことで知られる。とりわけ日本画の分野では、南画家と呼ばれる青木翠山、林青山、青柳琴僊、女流画家の角田静竹などが挙げられるが、戦争で疎開してきた野沢蓼洲と北村明道の存在もあって、終戦後の一九四五年十二月、いち早く利根美術協会(現在の利根沼田美術協会)を立ち上げた。

利根美術協会は幅広い分野を取り込んだ県展の地域版のようなものだが、それが可能だったのは日本画だけでなく、洋画の金子真二郎(真珠郎)、彫刻の初山三穀、俳画の横山楽水など様々な分野でリーダーとなる作家が居たからだ。それでも初代会長には野沢蓼洲が選ばれ、その後長く会長を務めた水墨画家・岸大洞に代表されるように、日本画はこの地域の特徴と呼べる気がする。

その端的な表われが、一九七三(昭和四十八)年に第10回展を開催した岳美会の存在だろう。これは沼田女子高の美術教師・塚越岳が主宰したもので、当初主婦層を中心に日本画を普及することに目的を置いていたようだが、一九七九年に塚越が亡くなって

略歴 豊野芳子 YOSHINO TOYONO

1962 沼田市に生まれる。

1980 利根商業高校を卒業し、市内の金融機関などに就職。

2012 日本画を学び始め、利根沼田美術協会に入会。

2014 利根沼田美術協会賞受賞し会員推挙。岳美会に入会。

2016 日本美術院 角田信四郎に師事。2025年。

第67回群馬県美術展に《秋彩》初出品。

2017 第68回群馬県美術展で《やわらかな日》佳作受賞。

2018 第69回群馬県美術展で《浅春》県美術会賞受賞。

2019 第70回群馬県美術展で《樹韻》県美術会賞受賞。

2020 第75回春の院展に《邂逅》初入選。

2021 第76回春の院展に《憧憬》入選。

再興第106回院展に《響》初入選。研究会員推挙。

第72回群馬県美術展で《樹奏》県美術会賞受賞。

2022 第77回春の院展に《黄朽葉の風》入選。

群馬県美術会準会員推挙。

再興第107回院展に《秋懐》入選。

第73回群馬県美術展で《森へ》準会員奨励賞受賞。

2023 みなかみ町の民泊みくに亭で二日間の初個展。

第78回春の院展に《風薫る》入選。

再興第108回院展に《想い逢か》入選。院友推挙。

第74回群馬県美術展で《寂として》準会員賞受賞。

2024 群馬県美術会会員推挙。

再興第109回院展に《邂逅》入選。

第75回群馬県美術展で《冬暁》山崎種二記念特別賞受賞。

2025 第80回春の院展に《山霧》入選。

第76回群馬県美術展に《静穏な森》出品。

2026 企業メセナ群馬芸術文化奨励賞受賞。

第81回春の院展に《淡雪の眠り》入選。

(株)ヤマトで大規模個展。

神奈川県葉山町

レスポンスブルツリズムの取り組み

(責任ある観光)

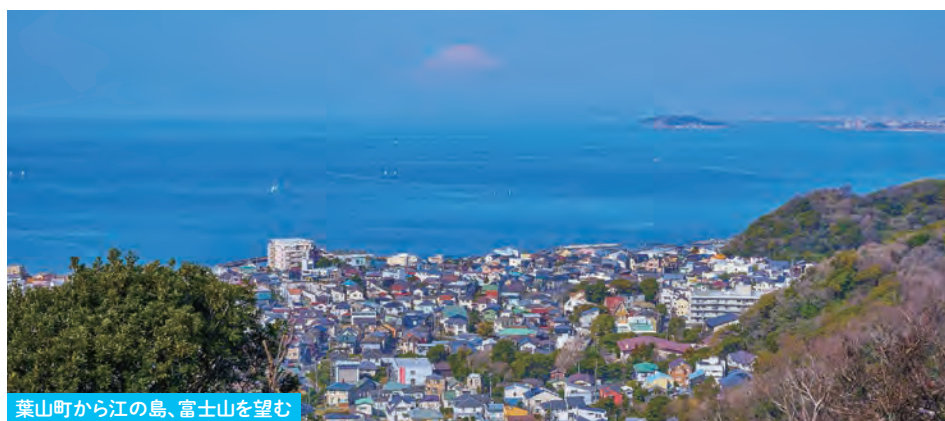
神奈川県葉山町は、2026年7月に、「レスポンスブルツリズム」(責任ある観光推進アクションプラン)を策定しました。これは、観光客と住民が一体となり、葉山の美しい自然環境や地域独自の空気を次世代へ守り伝えていくための「旅のスタイル」を提唱したものです。

山梨県葉山町長は、「葉山町は御用邸の町、別荘の町であるとともに、葉山の住民は町にとっても強い愛着を持っています。目立つた観光地は無いですが、穏やかな海、静寂と自然に包まれる感覚が魅力になっており、観光客の皆様は、葉山の良さを共に守っていきましょうとお声がけをしています。」と話してくれました。

暮らすように旅する

葉山町は2022年から「はやまエシカルアクション」として、「自然環境・人や社会・地域を思いやった行動」を町全体で推進し、持続可能な観光モデルを構築しています。

観光客一人ひとりが「自分がこの町の環境を守る一員である」という意識を持つことを求めているのが最大の特徴です。レスポンスブルツリズムを支えるためには、観光客が「お客様」という受動的な立場から、「その土地の一時的な住民(その場の環境や景観を守るメンバー)」へと意識を切り替えることが大切なことなのかもしれません。



葉山町から江の島、富士山を望む



葉山町役場庁舎

空調設備等

改修工事が完了

建設プロダクトのヤマトは、葉山町役場の機械設備工事(吸収式冷温水発生機・ファンコイルユニットの改修)、建築工事(天井・防水工事の一部改修)、電気工事(自家発電設備)を施工しました。

工事名…役場庁舎空調設備等改修工事

工期…2025年6月～2026年7月

所在地…神奈川県三浦郡葉山町堀内2135



機械室



庁舎外観

大学と企業を繋ぐ 新施設を見学

関東学院大学は、5月7日(木)に「KGUオープンイノベーションスクエア・HAMARISE(ハマライズ)」を開設し、5月29日(金)に企業向け内覧会が行われ、(株)ヤマトから関係者が出席しました。

HAMARISEは、4月1日(水)にオープンした関東学院関内アカデミック・リサーチセンター(BASEGATE横浜関内タワー(横浜市中区港町1-11)12階)内にあり、大学と各企業の最先端研究や技術シーズを可視化し、新たな知と技術を生み出すための企業マッチングの役割を持っています。また、地域企業の製品や技術に関する情報も発信されます。当日の研究紹介コーナーでは、空調分野の技術開発展示があり、大学との共同研究など広がりが見込まれます。

「HAMARISE(ハマライズ)」ネーミングの由来
横浜を親しみ込めて呼ぶ「HAMMA」と、跳ね上がる、立ち上がるを意味する「RISE」を組み合わせた造語。



関東学院大学小山学長のあいさつ



HAMARISEの展示スペース

大学でヤマトの特色、 建設工業化を紹介

7月2日(木)、関東学院大学建築・環境学部の講義室で、同学部環境共生デザインコースの3年生を対象に(株)ヤマトの会社紹介、建設工業化の取り組みを説明しました。同学部では、建築と環境の共生をテーマに、企業や諸外国と一緒に研究を行っており、合わせて建築関連企業の動向を学んでいます。

(株)ヤマトの会社紹介では、創業の昭和20年に、社会基盤として不可欠な建築設備の設計・施工に着手したことや、地球環境問題への対応として、省エネ設備の開発などを手がけたことを説明しました。(株)ヤマトは、建築を通じて、豊かな社会づくりに貢献している企業であることを強調しました。また、建設工業化では、お客様に価値のある建築製品を提供するという企業姿勢に基づいて取り組んでいることを説明しました。建設の工業化により、人手不足など建設業の諸課題を解決しようとしていることや、デジタル化を進めて効率化、生産性向上を目指していることも説明しました。

建設業の将来を担う学生の皆さんに、(株)ヤマトの取り組みを知ってもらう良い機会となりました。



説明する(株)ヤマト大野部長(右)と田中主査



スライドを使って説明